

連載 **モリテツの**
東アフリカ
大陸に行く!

16 100億ドルのお買い物



て、渦を巻きながら濁流が流れてゆく。急流だ。これも恐い。水に入った途端、からだを持っていかれそうな迫力を感じる。



100mほど落下するバンジージャンプ

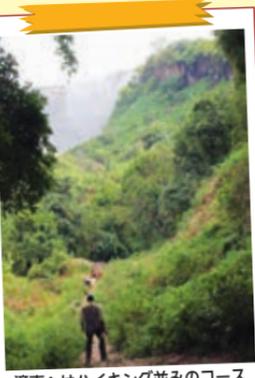


これが100億ドル札、1ドルでも買い損か

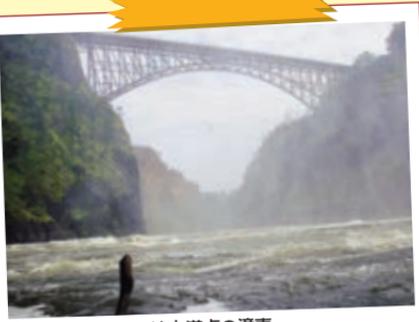
翌日、もう一度、ビクトリアフールズへ出かけた。入場口で「なに、あんたまた来たの」という顔をされた。この国20ドルは相当の高額だが、滝の持つ魅力の前には、この入場料は安い。

まだまだ滝は奥が深そうだ。ということで、まずは滝壺まで降りてみることにした。これだけの観光地でありながら、遊歩道から一歩はずれると、ほとんど人に出会うことがない。猿との出会いの場が多い。甲高い野鳥の声を聞きながら、低い灌木が茂る

滝の下まで500mほど下ったか。滝壺に出た。けれど、スケールが大きすぎて、滝壺のイメージなどない。大渓谷だ。白い水しぶぎを上げて、渦を巻きながら濁流が流れてゆく。急流だ。これも恐い。水に入った途端、からだを持っていかれそうな迫力を感じる。



滝壺へはハイキング並みのコース



迫力満点の滝壺

森哲志(もりてつし)/ジャーナリスト。日本エッセイストクラブ会員。朝日カルチャーセンター講師(エッセー担当)。朝日新聞社社会部記者歴40年。著書に『男は遍路に立ち向かえ』(09年長崎出版)、『団塊諸君一人旅はいいぞ!』(朝日新聞社)、『不屈のプレイボール』(河出書房新社、ミズノスポーツライター賞)など。この4月から、三陸沿岸の津波被災地と放射能におびえる福島県を取材。ホームページにて、現地の動画及びルポルタージュ「三陸大津波特集」を掲載中。<http://www.mori-tetsu.com/>

左前方にビクトリアフールズ橋が見える。ジンバブエとザンビアを結ぶ国境の鉄道橋で、100年ほど前にできた。今は鉄道は走っていない。カメラのファインダーを覗いた瞬間、あっ、橋から人が飛び込んだーと思いきや、バンジージャンプだ。ロープの長さ100mはあろうか。あそこまで行ってみよう、と来た道に戻った。

山道のわきをせせらぎが流れ、丸太橋がかかっている。まっ青な野鳥が林の中をかすめた。日本の情緒だ。後ろを振りかえると、滝が見える。あまりにビツブで、どこからでも望める感じだ。

遊歩道をもう一度、ぐるりと巡った。小さな吊り橋よりの石橋がある。橋の欄干が腰ほどの高さもない。霧状に水煙がちこめて5m先が見えない。渡るのが恐いほどだが、一気に渡りきった。途中、立ち止まって下をのぞく人はさすがにいなかった。

ビクトリアフールズ橋を渡ろうとすると、2mはありそうな背高のつぼが札束を切りながら近づいてくる。1枚をつまみ出し、「1ダラー、1ダラー」とおっしゃる。1ドルではお買い得だからどうだというわけだ。札のゼロを数えて、途中で紛れたので数え直すと、ゼロが10個。なんと10億ドル札。これが、かの有名なジンバブエ札だ。確かに1ドルでは安かろう、と1枚だけ買った。

バンジージャンプ受付は若者たちで賑わっていた。その中に同宿の日本人がいた。100ドル支払って、やり終えたばかりで「いやあ、最高だった」と爽快な表情。聞いた話が面白かった。受付ナンバーと測定体重を腕にサインペンで書かれる。これが町中では、英雄の印。「3、2、1、バンジー!!」カウンタダウンで、100m近く落下。50mほど舞い上がって、バウンドを何度も繰り返す。落ち着くと、滝も空も水面も見えてくるが、なにもかも倒錯しているとか。「それがまた最高。どうです。記念に一度?」。いや、100ドルもらっても、やる気はありません。